
ノンストップ・バレット

羽鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノンストップ・バレット

【Nコード】

N2588S

【作者名】

羽鳥

【あらすじ】

未知の細菌によって汚染された街。生きている人間は理不尽に殺され、死者は死してなお歩き続ける。高校生の彩月秋都はそんな不条理な世界から友人を守り抜き、生きて脱出するために奮戦する。そして見えてきた真実とは……？ 運命に抗う少年達と、運命に背く者達の物語。

1：オープニング

「……………」

4時間目、教師が黒板を使って微分法の説明をしている中、彩月^{あやつき}秋都^{あきこ}は机に頬杖を突いて窓の外を眺めていた。

校庭では1年生がマラソンをしている。踏み固められた土のトラックをひたすら周回することの何が楽しいのだろう。夏の暑さも収まってきたとはいえ、この真昼に近い時間帯に1時間も走り続けるのは決して楽なことではない。

少し考えてみる。

彼らだって学校の授業でなければマラソンをしようとは思わないだろう。

しかし学校に在籍している以上、授業は受けなければならない。そして社会の一員として将来生活していくためには学校に通わなければならない。それは当然のことだ。

ならば社会が機能しなくなった時、生徒はどうなるのか。

学校や法律という枷が無くなった人間はどこに向かうのか。

少なくとも校庭で走ってみようなんて思わない。

生きるか死ぬかの瀬戸際に追い詰められた人間が規律を守ろうなんて考えるのは稀なケースだ。

大概は他者を蹴落としてでも自分の保身に走ろうとするだろう。

例えば、今秋都の右斜め前の席で小説と思しき本を読んでいる女子生徒。

名前は分からないが彼女が非常に整った容姿をしているということとは他人に無関心な秋都でも分かる。

癖の無いセミロングの黒髪がまっすぐと肩にかかり、残暑の日差しを受けて光を放っている。陶磁器を思わせる白い肌に、形の良い

唇は桜色。眼鏡の下の大きく丸い目には長めのまつ毛から影が落ちていて、幼い顔つきの中でも唯一大人らしさを感じられる。落ち着いた風貌ではあるが、10人に聞けば10人が口を揃えて美少女と評価するだろう。

いかにも人畜無害そうな彼女が銃を突きつけられたとき、どんな顔をするのだろうか。

何かと理由を付けて命乞いをするのかもれない。

自分が死ぬか他人が死ぬか天秤にかけられたとき、彼女は進んで自分の身を差し出したりはしないだろう。

しかし、今彼女に同じ質問をしたとき、彼女は自分が犠牲になると答えると思う。

どちらが人間の本性だなんて決め付けることは出来ない。

追い詰められた人間は本能的に自らの保身を選んでしまうのだ。

秋都はこれまでそういう人間を何度も見てきた。

これからも秋都の日常はそういった命の瀬戸際の中に置かれるのだろう。

「日常、か……」

誰にでもなく呟いた声に右斜め前の女子が振り向いた。思った以上に耳が良い。

秋都と目が合う。

女子生徒は無表情を崩すことなく、秋都の方を見ていた。

そういえばこの女子は無口無表情で学内でも有名だったような気がする。あれだけ目立つ容姿を持っていながらそんな態度を取るといっなのはまさに宝の持ち腐れというやつだ。

秋都が知らないふりをして見返すと、女子生徒は何か言いたそうに眉をひそめたが、しばらくして無言のまま読書に戻った。その白い頬がわずかに赤みを帯びていた気がする。

日常。

そう、日常だ。

教師は学問を教え、秋都の右斜め前には無表情の女子生徒がいる。過去に何があるかと、今はそれが全てだ。変わらない日常の中で過ごしている。

世間を騒がせている連続殺人事件だって、今日は風邪で欠席している秋都の唯一の友人だって、不変の日常に当てられたひとコマでしかないのだ。

秋都は机の上で両腕を組むと、そこに顔をうずめた。いつもの居眠りだ。

ここで寝てしまっても、起きればまた日常が始まる。

黒板の前では教師が何か説明していて、右斜め前にはいつもの表情をした女子生徒が本を読んでいる。

そういえば彼女はいつも何の本を読んでいるんだろう。

ふと気になったが、今は授業中なので聞くことも出来ない。というか彼女は授業中に本を読んでいるのか。今まさに居眠りしようとしている自分に言えたことではないが。

だんだんと意識が薄れてきた。昨晩は課題をやっていたために少し寝不足だった。

今は寝てしまおう。そしてこの授業が終わってから彼女に何を讀んでいるのか聞いてみよう。

彼女はあの無表情で一言、本のタイトルだけを静かに答えるのだろう。

普段無口と云えど、彼女の声を1度も聞いたことが無いわけではない。教師に当てられたとき、他の生徒から話しかけられたとき、彼女は本当に小さな声で一言一言喋る。

それは耳を澄ましていなければ聞き取れないような声だが、とても透き通った綺麗な声だ。名前も知らない生徒だが、秋都はそのこ

とを何となく覚えていた。

彼女と話をするのが少し楽しみになってきた。

秋都が話しかける。彼女は表情を変えずに読んでいる本から顔を上げる。秋都が質問をすると、彼女はやはり無表情で本の題名を答える。

そのときの囁くような声、しかし澄んだ清流のように透明な声を期待しながら、秋都の意識は睡眠の中に沈んでいった。

それ以来、秋都が日常の生活に戻ることはなかった

目を覚ましたとき、教室は喧騒に包まれていた。

生徒のほとんどが窓に張り付いて外を見ている。時間はまだ授業中にも関わらず、教師はそれを止める様子もない。というか教師までが一緒になって外を見ていた。

一番窓際の席に座っている秋都としては非常に鬱陶しかったが、普段と違うその雰囲気不平を漏らすことは出来なかった。

……外に、何かいるのか？

秋都も窓に近寄って外を確認しようとしたが、すでに生徒が窓際に詰め寄っていて何も見えない。

ふと右斜め前の女子生徒を見ると、彼女も珍しく外が気になるように、読んでいた本に頬を挟んで座ったまま外を見ようと首を伸ばしている。そんなところからでは見えないだろうに。

秋都はこのままでは埒が明かないと思い、手近な男子生徒に話しかけた。

「なあ、これは一体何の騒ぎだ？ 何があつたんだ？」

「さあ？ 俺も詳しくは知らねえけど何か外で不審者が騒いでるみたいだぜ」

「不審者……？」

「ああ。急に校庭に入ってきてマラソン中の1年に噛み付いたらしい。その1年、今保健室で寝てるんだけど、ギャーギャー騒いで口々に治療も出来やしねえんだってよ」

不審者が噛み付き。1年発狂。

感染症か？ それにしてはずいぶんと発症時間が短い気がするが。

秋都が思考を巡らせていると、唐突に窓の前に出来ていた生徒の列に隙間が空いた。

一番窓側にいた生徒の一人が教室側に戻り、そのときに隙間が空いたようだ。

一瞬見える窓の外。

その短い時間は、秋都が外の状況を確認するには十分な時間だった。

固い地面のグラウンド。体操着姿の男女。さすまたで不審者らしき暴れている人物を取り押さえる3人の男性教諭。3人に取り押さえられている不審者。

何よりも不可思議だったのが、暴れている不審者がどう見ても死んでいるとは思えない傷を負っていることだった。

「なんだ……あれ………」

秋都が呟いた瞬間だった。

バンツ！ と教室のドアが開いた。

「あー……うー、あー………」

ドアを開いた人物、それは現在校庭で取り押さえられている不審者にも似た様相だった。

教室の皆の視線がその人物に向く。

体中から血が吹き出っていて、体の至る所に抉られたような傷がある。着ている衣服もボロボロで、まるで大型の肉食獣に襲われたようにも見える。指や耳など、欠損している部位は一ヶ所や二ヶ所ではない。さらに、ところどころに残る欠損していない部分は青黒く腐っていて、膿のような黄色の液体がにじみ出ている。

その人物が低く唸りながらゆったりとした足取りで教室に入ってくる。

あまりの衝撃に誰も反応が出来ず、教室中が沈黙した。

その静寂を破ったのは1つの放送だった。

「全生徒、教員に連絡します！ 現在校内に不審者が侵入しています！ 私たちには抑えきれません。各自で対処し、校外に避難して

ください！ 繰り返します！ 各自で対処し、校外に非難し……く、来るなあああ！ うわあああああ！」

ブツツ、と放送が途切れる。

次の瞬間、教室は悲鳴で満たされた。

「う、うわあああああ！」

「逃げるおおお！」

男女全員が教室の扉に殺到した。教室には前後に扉が設置してあり、”不審者”と思われる人物が入ってきたのは前の扉からだ。自然と生徒は後ろの扉に集中した。

「どけよ！ 邪魔だ！」

「通してよ！ 逃げられないじゃない！」

数十分前には仲良く談笑していた生徒同士が罵り合いながらも何とか教室から這い出て行く。

窓際から廊下側へと生徒が移動したため、秋都も含むその間にいた者は人の波に流されるように机や椅子と共に押し倒された。

不審者は濁った瞳で教室の入り口に殺到する生徒を睨み、ゆっくりと近寄ってくる。

「クソツ！ 何だっつてんだよいったい！」

生徒の波に流されながらも何とか立ち上がり、周囲を確認する。

血まみれの不審者は走れないのか、歩いて生徒の群れに近寄っていく。幸か不幸か、その白く濁った瞳が一人で立っている秋都の方

を向く様子は無い。

と、視界の隅に小さくうずくまる陰が見えた。

右斜め前の席に座っていた女子だ。倒れた椅子や机の間で右足を抱えるように床に座っていた。

「どうした、大丈夫か？」

「……………痛っ！」

傍によって確認すると、どうやら女倒れた際に足を挫いてしまっただらしい。足首が少し腫れ上がっていた。

女子生徒は顔を苦痛に歪めた。せつかくいつもと違う表情が見れたというのにそれがこんな顔だったというのは全く喜べない。

「ぎゃああああ！ く、来るなあああ！」

「うー…………、ああ！」

不審者が、近くにいた生徒の1人に噛み付いた。

首筋の露出した部分にその歯を立て、顎の力だけで乱暴に皮膚を噛み千切る。同時に噴出す鮮血。

生徒の一人を噛み殺す。

教室中をさらなる混乱に陥れるには、十分な映像だった。

「きゃあああああ！」

「うわあああ！」

そこら中で悲鳴が上がる。

ダメだ。ここにもしても仕方が無い。

放送では各自で対処しろと言っていた。おそらく学校中が似たような状況で、教員が助けに来ることもない。ここにおいても警察が来る前にあの不審者に殺されてしまうだろう。

「逃げるぞ。掴まってる」

「へっ……………?」

秋都はそれ以上の説明もせず、その女子生徒の小柄な体を抱えると、教室の入り口へと駆け出した。

国家、企業、種族、個人、世界、様々な思惑が交差する事件は、そうして始まった。

1：オープニング（後書き）

作者の羽鳥です。

もう1つの連載の更新ほったらかしてこんなものを書いておりました。

この話（1話）の原型を書いたのが数ヶ月前、登場人物を若干変えて書き直したのがそれから少し後、やっぱり変だったので登場人物戻して書き直したのがさらに少し後、そしてさっき校正と加筆修正を終えて、投稿しました。書き直すたびに丸つきり内容が変わっています。エロ アホ 暴走（今ココ）。

まあ内容が変わっていると言っても、話の本筋や人物の設定は変わっていません。とか言ったところで誰が喜ぶ情報でも無いんだけど。

とりあえず、既存のゾンビものとは差別化できるように、いろいろと進めていきたいと思えます。なるたけつじつまは合うように。（普通のナイフ一本で無双乱舞とかはちょっと、ね？

まーそれでもプロットの時点で明らかにぶっ飛んでいます。許せ。

では、また次回お会いしましょう。

感想とかくれると嬉しいやごめんなさい調子乗りたいけしやあしやあとすいません土下座。

2：ふたりの距離

正直、心当たりが無いわけではない。

助かるためのアテもある。

しかし、それを使う気にはならなかった。

それに助けを求めたくはなかった。

その存在を肯定しなくなかった。

自分がその一員であるなんて、考えたくもなかった。

「とりあえず外は落ち着いたみたいだな」

1時間前まで鳴り響いていた悲鳴が今ではまったく聞こえない。

現在、秋都は例の女子と一緒に物理準備室に隠れていた。

準備室は物理室の隣に併設されていて普段は生徒が勝手に入らないように鍵がかけられているのだが、直前の時間に使われていたように秋都たちが訪れたときには鍵がかかっていなかった。

2人はひとまず中に入って内側から施錠し、立てこもっていたのだが、

「さて、どうしたものか……………」

「……………」

大量の情報が脳で錯綜し、しかし状況を判断するための決定的な情報は不足していた。

グラウンドで暴れていた者、教室で生徒に襲い掛かった者、両者とも同じ”何か”であることは間違いないだろう。

そして、その”何か”の元が人間であったことも一目瞭然だ。

ここに逃げて来る途中にも似たような奴が何人もいた。おそらく校内のそこら中にアレがいるのだろう。いや、校内だけでなく街も同じことになっているのかもしれない。

それらは人を襲い、食い殺している。

まるでホラー映画だ。

隣に座っている女子生徒に目を向ける。

自分の体を抱えるように体育座りをしてうつむいている黒髪の女子。

椅子の無い教室で、二人は身を寄り添うように並んで床に座り込んでいた。

「とりあえず、自己紹介をしておくか。俺は彩月秋都だ。彩る月に秋の都」

秋都の言葉に女子が顔を上げた。

そして抑揚の無い小さな声で、ささやくように応える。

「知ってる。同じクラスだから」

それもそうだ。むしろ夏も終わりのこの時期になってもクラスメイトの名前を知らない秋都の方がおかしいのだ。

秋都は居心地が悪そうに視線を逸らす。

「私は水山凜桜。凜桜でいい」

「凜桜な。なら俺のことも秋都でいい。苗字はあんまり好きじゃないんだ」

凜桜の無言を了承と受け取り、秋都は次の話題を提示するために立ち上がった。

隣に座っている凜桜が秋都の行動を目で追う。

秋都は2枚のスライドガラスがはめ込まれた窓の側に立ち、外を見下ろす。

そこはまさに地獄絵図だった。

死体だらけのグラウンドには死んでもなお動き回る生徒が至るところに立っている。その姿は人としての形状すらも損なっている者から、傍目には普通の人間と変わらないような者までいた。見える範囲に生きている人間はいなかった。もつとも、あの傷だらけの生徒達が生きているのか死んでいるのか秋都には判断しかねるのだが。校外も似たような状況に陥っていて、警察のものと思われる発砲音や悲鳴が窓ガラス越しに聞こえてくる。とどころで黒煙が上がっているのは火事か交通事故でも起きているのだろう。

「ひどい……」

「うわっ!」

いつの間にか横に凜桜が立っていた。

覗き込んでいる窓が小さいので、秋都の顔のすぐ右下に凜桜の頭がある。ほとんど話したこともない人間とこの距離は、人付き合いの苦手な秋都には少し恥ずかしかった。

秋都は不自然な動作で窓から離れて適当な本棚に寄りかかる。

見れば、凜桜の足首の怪我はある程度動けるまでに回復しているようだ。

「あれは……何だと思う？」

「へっ？」

秋都の記憶では、無口美人と有名な凜桜が自分から誰かに話しかけたことはほとんど無いはずだった。

突然の質問に気の抜けた声を出してしまう。

「人……なのかな」

「人だったのは間違いないと思う」

それだけ答えて秋都の言葉は途切れる。

しかし続きを期待するような眼鏡越しの凜桜の眼差しに、秋都は「あくまで確証は無いが」と前置きしてから始めた。

「類似した現象として狂犬病がある。知ってるかもしれないが、発症した動物や人間は噛み付いて他の固体に感染させようとするんだ。細部は違うが、行動だけを見れば”アレ”が人を襲っているのと同じ。自我を失う症状としては………確か、虫をホストにする寄生虫にいくつか例があったな。寄生された生物は痛覚に反応しな

くなったり、明らかに異常な行動を取るようになる。あとアフリカの何処かに、突然食人衝動に目覚めて人を襲うようになる風土病があるってのを聞いたことがあるな。遺伝病とも言われてるが詳細は明らかになってない。……………こんなところか」

「でも、個別の症状だけが一致するのなんて珍しくない」

確かに1つ1つのことに限定して共通点を見つけても仕方がないだろう。高熱が出るからインフルエンザと肺炎が同じだと言うようなものだ。

しかし話はこれで終わりではない。

「俺が言いたいのはこの事件の真実じゃない。あくまでこういう症状の病が存在するってことを言いたいだけだ」

「……………?」

理解の追いつかない凜桜が首をかしげる。

普段なら可愛らしい動作なのかもしれないが、状況が状況である。秋都は複雑な心境になりながらも話を続ける。

「ウイルスを組み合わせさせて致死性の高い病原菌を人工的に作り出す技術はすでに確立されてるんだ。さらにその応用が可能だとしたら?」

「……………」

「そもそもこれだけの感染力を持つ病気が突然、それも自然に発生したりするわけないだろう」

凜桜からの反応は無い。

一拍の間を置いてから、言った。

「これは人為的に行われたテロだ。それもバイオ兵器の開発が出来るところを見ると相当大規模な組織、国という可能性もある」

「そんなことが……………」

「無いとは言い切れない」

妙に断定的な秋都の口調に凜桜は反論することが出来なかった。秋都の仮説は筋は通っている。

「でも、アキトはなんでそんなことを知ってるの？」

「――高校生の知識にしては詳しすぎる。凜桜はそう言いたいのだろう。」

「えっ、あ、いや……………この間そんな感じの小説を読んだからな」

「小説、タイトルは？」

凜桜は読者家であり、家でも学校でも常に本を持ち歩いている。

読んだことはなくとも名前くらいは知っているかもしれない。

しかし、

「忘れた。あんまり面白くなかったしな」

「そう」

簡潔な秋都の答えに凜桜はそれ以上に淡白に返す。

こんな状況でも凜桜の無口無表情は変わらない。

いや、少しだけ話してみても、凜桜は無口というよりも必要の無い会話をしない性格なのだ。秋都は気づいた。

無表情というより、表情を変えるための感情が欠如してしまっているような印象だ。

詳しく本人に聞いてみることも出来たが、さっき初めて話した人間にそこまで踏み込むのも何となく憚れるので止めておいた。

「何にしてもしてもだ。アレに傷を付けられると何かが感染して自我を失い、数時間で人間を食う不死の化け物になる。それだけのことだ」

それだけのこと、とは軽すぎる表現だが、実際秋都の表情には焦りも恐怖も無かった。事件が起こる前の授業中と同じで気だるそうに軽く目を伏せている。

無表情の凜桜と秋都が一緒にいると、2人はまるで授業をサボって空き教室で時間を潰している生徒にも見えた。

それでも決して危機感が無いわけではない。

「この教室もいずれはアレに気づかれるだろう。早く安全な場所に逃げないと」

学校のように人間が密集している場所は危険だ。

秋都が寄りかかっていた本棚から一步前に出て背伸びをする。

窓の外は相変わらず死屍累々といった様子だが、さっきと比べれば少し落ち着いている。

動くのなら今だ。

「足首の調子はどうだ、動けそうか？」

凜桜は無言で首肯して立ち上がった。

軽くスカート裾を払ってから、秋都に向き直る。

おそらく激しい動きはまだ難しいだろう。移動するにも凜桜の調子に合わせなければならぬ。

「とりあえず学校を出る。俺のそばから離れるな」

秋都が廊下へと繋がる扉の鍵を開けようとすると、不意に凜桜が「ちよつと待つて」と秋都を止めた。

凜桜は怪訝な表情を浮かべている秋都に歩み寄ると、秋都の手を握って自身の胸へと押し当てるように抱きしめた。

「えっ？ へっ？」

「……………」

凜桜は何も言わずに突然のことじろたえる秋都の手を抱きしめる。目を瞑って何かを祈るように、静かに、力強く、手を握る。

制服越しの胸の柔らかさと確かに伝わる彼女の体温に、女性経験の無い秋都は戸惑った。

白く細い凜桜の指は絹のような感触で、感情の起伏が無い氷のような性格に反してその手は温かかった。

その様子を見ていて、秋都は気づいた。

手が震えている。結んだ口元も僅かに歪んでいる。

「そうか。怖い」のか。

そんな当たり前のことによろやく思考が行き着いたのは、われながら気遣いが甘かったと自省する。

ここはセオリーらしく何も言わずに抱きしめるべきか気の利いた言葉を言っつてやるべきか悩んでいると、答えが出る前に凜桜が手を

離れた。

「充電完了」

「そうか」

顔を上げた凜桜は変わらない無表情だ。

もしかしたら凜桜が怖がっていたのは俺の気のせいだったのかもしれない。常に無表情の凜桜が怯えている様子は想像できないし、すでにさっきの表情は空目のような気がしている。気にはなつたが、秋都はそんなことを気にする余裕は無いとすぐに気持ちを切り替えた。

「行くぞ……………」

鍵を開けた扉をそつと横にスライドする。

顔だけ出して確認すると、見える範囲にアレはいなかった。

ゆっくり、足音を消して一步を踏み出す。その後ろに凜桜が続く。静寂が血痕の残る廊下の空気の冷たさを強調している。

数歩歩いて、秋都は思い立ったように後ろを振り向いた。

そこには凜桜が立っている。艶やかな黒髪が似合う清楚な少女。

秋都は無言で彼女の手を握った。

「行くぞ」

手を繋いで歩くということ。

凜桜の恐怖を和らげるために秋都が思いついた精一杯の気遣いだつた。

状況的に片手がふさがるのは危険だし、少し話しただけの人間となんて嫌がられるかもしれないと思つた。

しかし凜桜は秋都の目を真っ直ぐに見据えて、例の無表情で言った。

「うん」

ゆっくりと握り返す感触に、それ以上は何も言わないで前向き直る。

ふと、先に行く秋都の中に1つの疑問が浮かび上がった。

とある単語が出てこない。

日常生活で頻繁に使うことはないが、誰でも知っているあの言葉名前か。いや、呼び名という方が確だ。

無音の空間で出来るだけ音を立てたくないのに凜桜には聞かなかった。喉元まで出かかっているのだ。

別に無理して思い出す必要は無いのだが、一度気にしてしまうとどうしても思い出したくなる。

しばらく廊下を歩いて階段のある曲がり角まで行くと”ソレ”が姿を現した。

爛れた皮膚、体中には猛獣に襲われたかのような抉られた傷。出血で衣服を真っ赤に染めて、染み出ている膿のような液体は見るだけで人を不快にさせる。

その姿を見て、秋都は思い出した。

「ゾンビ」だ

2：ふたりの距離（後書き）

次の更新は可能な限り早く……できるかな？

いろいろと伏線を散りばめておりますが、分らないところは分らないものとしてとりあえず読み進めておいてください。
ではまた次話もよろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2588s/>

ノンストップ・バレット

2011年12月22日23時48分発行